

令和7年度日野市特別支援教育推進委員会（第2回）

－要点録－

1. 日時場所等

- (1) 日時 令和8年2月2日（火）
- (2) 場所 日野市発達・教育支援センター「エール」2階会議室・地域コミュニティ室
- (3) 出席委員 折茂慎一郎委員長、小島幸子副委員長、小貫悟委員、黒澤一慶委員、村田幹生委員、中村由加里委員、宇田川裕美委員、竹山弘志委員、前田健太委員、山口早苗委員、中田秀幸委員、渥海知子委員
- (4) 事務局 発達・教育支援課発達・教育支援係 高原洋平、吉沢隆助、外山雄一、木暮郁美、田邊海

2. 要点録

(1) 委員長あいさつ

先日、所属校で研究授業があり、講師の先生から改めて特別支援教育の足元を見つめる大切さを学んだ。子供をほめる、保護者も自身をほめることで自己肯定感がはぐくまれる。授業の焦点化、視覚化など、改めて取り組んでいきたい。

(2) 協議意見交換

1) 第6次日野市特別支援教育推進計画（令和7年度）の取組状況について事務局より第6次日野市特別支援教育推進計画取組状況（R7進行管理表）の、重点施策と新規施策を中心に説明。

【委員からの意見・質疑】

<合理的配慮の推進>

○都立学校への受験に際し、特別措置の申請状況を把握しているか。合理的配慮は高校・大学とつながっていくもの。中学校の定期試験はそのスタートとなるもの。推進するにあたり、特別措置の申請状況を把握することを検討してほしい。申請先が都ではなく、各都立高校になるため、書き方によって申請が通ったり通らなかったりがある。

○(事務局より)現状把握していない。

○所属校で1件別室試験をお願いしている生徒がいる。

<教員の理解啓発及び指導力向上に向けた取組の推進>

○10年前、15年前から実施していた研修で、こちらからすると当たり前の内

容についても教員は異動があり、新しい先生が入ってくるので継続して実施する必要がある。日本LD学会が自治体向けの研修動画を作成したので、紹介できる。

<ひのスタンダードの実践及び改善>

○ひのスタンダードの冊子はUDの内容とインクルーシブ(包み込むモデル)の実践を集めた内容。発行から時間が経ち、インクルーシブの考え方ができているので、冊子にのっている理念や思いは立ち位置変える必要あるのではないか。検討してほしい。

<校内委員会を中心とした学校における支援体制の充実>

○スクールソーシャルワーカーが校内委員会に参加しているが、一部学校からスクールソーシャルワーカーの意見が学校ではなく家庭よりになっているとの声がでている。

<特別支援教室（ステップ教室）等に関する特別支援教育推進体制の充実>

○退室率の低下について保護者意向によるものか。

○(事務局)保護者意向もある。

○東京都も令和3, 4年は原則の指導期間1年について厳しかったが、現在はそこまでシビアではないように思う。ステップ教室は支援のお試し、有効な支援を見つけに行く場としてとらえ、支援を実践するのは通常級、ステップ教室を退室しても支援の継続は通常級で行うことを保護者によく説明する必要がある。その理解が得られないと、保護者は支援がなくなってしまうと不安になってしまう。

<リソースルームによる個別・少人数指導・支援の充実>

○リソースルームティーチャーの役割拡充について反応は。個別指導が有効な児童もいる。

○役割拡充の効果検証をして頂いて、研修などに活かされるとよい。

○(事務局)学校からは肯定的な意見が多いが、一部リソースルームティーチャーからは業務負担等の声もでている。一律にグループ指導に切り替えたわけではなく1～3名で児童や学校の実態に合わせて指導するよう依頼している。

<医療的ケア児への対応>

○医療的ケア児の入学予定も聞いている。早い時期からの情報共有と丁寧・迅速な引継ぎをお願いしたい。

<「かしのきシート」による支援情報の共有と内容の充実>

- 合理的配慮の項目ができたが、状況はどうか。
- (事務局)今年度改定、年度が明けないと状況はわからない。
- 今後検証してほしい。合理的配慮は申請主義で本人が望まなければ受けられないもの。小さい時からの積み重ねが重要だと感じている。
- 本人の願い等の聞き取りが難しい。

<副籍制度の推進>

- (事務局)今年度の見直しで重点事業に位置付けた。
- 今年度は順調に進められた。約40名、延べ100名程度を受けていただいた。受け入れる学校の経験によって差はありそう。副籍制度の充実に向け、事例集のデジタル版も作成している。忙しいとは思いますが、教育委員会に調整担当がいると調整が進むと思う。

2) 第1回推進委員会より研修のデータ収集について

- 参加者にアンケートを実施し、成果の集約と今後の展望についてのヒアリングができた。日野市内の教員にはクラウド上でフィードバックも実施することができた。幼稚園の教員や特別支援学校の教員など、組織が異なる参加者へのフィードバックが検討事項である。
- 次年度、参加者が学びをデザインしていくような研修の在り方を検討していることから、成果の共有や、蓄積方法なども参加者とともに最適な方法を模索していく。

3) その他(意見・感想等)

- わかば教室に特別支援が必要な子が入ってきている、走り回ったり元気。特別支援が必要な子が不登校になる要因を考えている、リソースルームティーチャーが不登校対応できるようになった部分もある、学校で不登校にならない指導を期待したい。
- 1学期不登校支援の校内別室に通っていた児童が3学期になり教室に戻ってきている。
- 感覚過敏等学校での刺激が多すぎると感じている児童がわかば教室にきている。保健室にイヤーマフもあると思うがちょっとした配慮で学校に来られる子もいると思われる。ノイズキャンセラーのイヤホンや高性能の耳栓もある。教員は慣れてしまっているが、学校はうるさいところだと教員側も認識する必要が

ある。

○ある授業がうるさいと教室に入れない生徒がいるが、教員の立場だと何がうるさいのかがわからない。

○教室の前方の掲示板のカーテンを閉める等基本的なUD環境をはじめとして、今後も「ひのスタンダード」の周知啓発に努めていきたい。

○リソースルームティーチャーの役割拡充について、現場の声を聴きながら研修に生かしていきたい。

○幼稚園では感覚過敏の子供が増えてきている、合理的配慮だらけで一人ひとりにあった対応をしているが、環境に慣れていけるかバックグラウンドでも変わってくるので背景も考えながら支援をしたい。幼児は大学生と違い自分で合理的配慮等の声が出せないなので、よく子供の声を聴きながら対応したい。

○日野スタンダードの包み込むモデルは大切にしていきたいが、異動等で継続していくことの難しさを実感しているので、今後も伝えていきたい。

○児童館も不登校支援の受け皿になっている。感覚過敏の話がでたので、対応も考えていきたい。医療的ケア児の受け入れも重要なテーマ、一人ひとり丁寧に専門家の意見も聞きながら実施したい。

○昨年度障害者差別解消推進条例を改定し、理念にインクルーシブ社会を入れた。合理的配慮について自分でいえる大人、社会になると良い。